

高橋朋子 (2009)
『中国帰国者三世四世の学校エスノグラフィー
母語教育から継承語教育へ』生活書院、340頁

柳 美 佐

日本の公立小学校にニューカマーと呼ばれる外国人児童たちが通学するようになって久しい。彼らの中には、ブラジルやペルーなど南米からの出稼ぎを目的とした日系移民の子ども達がいる一方、定住を目的とする中国からの帰国者の子ども達も含まれる。

本書は、幼少期に渡日した中国帰国者の子ども達や日本生まれの中国帰国者三世四世の子ども達が、日本の学校でどのような生活を送っているのかを、2年弱のフィールドワークをもとに描き出したエスノグラフィーである。著者は元小学校教諭であり、現在大学で日本語教育に携わっているが、本書は、大阪大学に提出された博士論文を元に書かれたもので、二部構成、全八章からなっている。前半の第Ⅰ部では、参与観察を通して浮かびあがった、日本の学校での子ども達の姿を、多くのエピソードを通して描いている。第1章では在籍学級での様子、第2章、第3章ではそれぞれ日本語教室と中国語教室での様子を描いている。第4章では子ども達の学力不振と進路選択について、第5章では、日本語と中国語のいずれの言語においても十分に意思疎通ができない中国帰国者親子のコミュニケーションについて述べている。それらを元に第6章では、中国帰国者の子ども達をめぐる教育の問題点と、今後望まれる支援方法について提言している。後半の第Ⅱ部は、理論的背景の説明である。第7章では、ニューカマーの子ども達の教育に関する先行研究と本書の扱う主要概念の説明がなされ、最後の第8章では、言語能力テストの結果から子ども達の言語能力について評価している。

ひと口にニューカマーの子ども達と言っても、その背景は多様である。学齢期、もしくはそれ以前に渡日し、日本の小学校に通う彼らの中には、多言語状況で育ちながらいずれの言語も年齢相当の発達を遂げていない、いわゆる「ダブルリミティッド (Double limited)」の子ども達が多いといわれる。著者が参与観察をした小学校では、三世四世ともなると日本語での日常会話が流暢なため、彼らの学校生活に表面上の問題はないように見えると述べている。しかしながら彼らの多くが、日本語が「しゃべ

れるのに、勉強ができない」(p. 30)。本書の特色は、同じ中国帰国者の子ども達であっても、学齢期に渡日し日本の小学校で学ぶ子どもと、日本生まれの帰国者の子どもでは、学力不振の原因とその支援方法が異なることを明確にした点にある。前者の場合、中国での生活歴や学習歴により「母語」である中国語を身につけているため、編入後の教科指導について母語による支援をすることもできる。しかし後者の場合、母語にあたる言語、すなわち自らの欲求や感情を十分に表せる言語を持たないため、彼らへの支援は、母語を確立した編入児童への支援の取り組みそのままでは通用しない。本書では、日本で生まれ育ち、日本語を流暢に操っているように見えているにもかかわらず、給食に出てくる「ひじき」や「なす」など、日本の子どもであれば誰もが知っているようなおかずや野菜の名称を知らない子ども達のエピソードを採り上げ、その原因を追究している。驚くことにその子ども達は、日本語はもちろん中国語であっても、家庭や学校で必要とされる基本的な語彙を十分に習得していない。本書によれば、生活維持のために長時間労働を余儀なくされる中国帰国者の親を持つ子ども達は、幼少期に毎日の食事や会話を通して、家庭での社会性を学ぶチャンスを十分に持てなかったため、日本語と中国語の両言語において獲得した語彙が非常に少ない。また、日本語でのコミュニケーションが困難な両親と、中国語よりも日本語が上達する子ども達との間の意思疎通が徐々に困難になっていく事例を指摘しながら、親子間でのコミュニケーションが時間とともに希薄になる状況が、子どもの学校生活に与える影響についても論じている。しかしこの問題の要因のひとつ、すなわち三世四世の子ども達の親世代が、日本生まれであるにもかかわらず、家庭での日常会話すら日本語で充分できない原因について本書は十分な分析を行っていない。

本書ではまた、編入児童に対する母語保持教育として行われている中国語教室についても詳細に記述分析しながら、日本生まれの子ども達に対しては、親とのコミュニケーションに必要な「継承語」としての中国語教育という枠組みが必要であるとしている。

学力不振や生活面の乱れなど、「帰国の子」の問題は、日本語教室や中国語教室の先生に「丸投げ」されることが多い。子ども達の学業面だけではなく、彼らの親たちへの対応に孤軍奮闘する支援教室の教師の活躍は、その支援教室さえも周辺化してしまいがちな現状に警鐘をならす。

本書では、それぞれの場で必死に生き抜こうとする子ども達の姿が、テーマごとに分けられた多くのエピソードの中に記述されている。そして、一人ひとりの子どもの背景は多様であり、彼らの学力不振が、ニューカマーゆえの日本語理解力不足による

ものだとひとくくりにできるものではないとしながら、その複合的要素を十分に理解することの重要性を説く。

子ども達を「同化」すべきか「特別視」すべきか。著者は調査対象となった二つの小学校の例を提示しながら、彼らの置かれた家庭環境や生育歴をも考慮した、より包括的な支援を提案している。その中で、全ての人が社会参加の機会を得ることができ、またそのための能力育成を社会の側の責任と捉える「インクルージョン（包摂）」という概念を導入し、教育においては、マイノリティの子どもを含む全ての子ども達が、学校の提供するあらゆる範囲の教育的、社会的機会に参加することを保証するという目標のもとに、学校を全体として改革し作り直す過程が必要であると、先行研究をもとに論じている。ただし、著者自身が課題としてあげているように、本書で焦点をあてたのは子ども達が所属する学校や家庭だけであり、彼らの居住する地域社会についてはほとんど言及されていない。親世代の長時間労働の根本的要因の解明や、学校外での子どもの居場所作りを含めた地域や行政の役割を明確にすることなしにこの問題の解決はありえない。その点で著者の提唱する、より包括的で具体的な支援策のための議論が充分になされたとは言い難い。

異なる文化背景を持つ外国人児童を受け入れる日本の公立小学校において、彼らの日本語能力育成と学力向上の保障、バランスのとれた人格形成のために、教育はどのような具体的アプローチをすべきであろうか。本書では、時間の経過とともに年齢が増し、やがて否応なく実社会に放り込まれる子どもたちの実情に言及しながら、この問題の緊急性を訴える。運よく進学の間を過ごす子ども達がいる一方、言語という思考のツールを持たないまま、現実社会にでていく子ども達もいる。言語教育の役割とは何か。また、自らの思いを十分に表わす言語を持たない子ども達に、今どのような支援をすればよいのか。これらの問いから、言語教育関係者は眼をそらすわけにはいかない。

景気の動向に左右されるとはいえ、今後日本において、外国人児童・生徒の数が増加するであろうことは想像に難くない。将来多くの教育現場において、本書で描かれたような事例が珍しいことでなくなるのは必至である。日本語以外の言語を母語に持つニューカマーの子ども達に対する指導実践の情報は広まりつつあるが、三世四世の学力不振の原因に焦点をあてた研究は希少である。本書は、今後同様の問題に直面するであろう現場の教員に、多くの示唆を与える好著といえよう。マイノリティの子ども達に対する支援の在り方を模索する関係者に本書をぜひお勧めしたい。

(京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程)